

中村邦生著『月の川を渡る』／『〈虚言〉の領域』

高山敏幸

中村邦生氏の作家としての、そして批評家としての集大成が二冊、ほぼ同時期に刊行された。前者は『月の川を渡る』、後者は『〈虚言〉の領域』。それぞれ、作品社とミネルヴァ書房からの刊行である。『月の川を渡る』は九三年に「冗談関係のメモリアル」で文学界新人賞を受賞して以来、「文学界」で作品を発表し続けてきた氏の代表作であり芥川賞の候補作でもある。「ドッグ・ウォーカー」、本書の表題作である「月の川を渡る」、そして「夜に誘われて」の三作が収録されている。もう一編の芥川賞の候補作である「森への招待」は残念ながら収録されていないが、特に「月の川を渡る」はその年に発表された優れた短編を収録している叢書『文学1998』にも転載されたこともあり、氏の十年を越す作家活動に触れてみるにはよい選定となっていよう。『〈虚言〉の領域』は「文学の在り処」と題された全四巻の評論叢書の第二巻として刊行されたものである。このシリーズは刊行の辞にも述

べられているように、文学に「魅力的な謎」を付与しすることで「文学としての輪郭を描き出そうとする試み」から俊英の批評家たちの論説を集めたものである。なかでも本書は『〈虚言〉の領域』という書名が示すように、フィクションの深さを測定しつつ、その快樂に触れようとした知的冒険心に溢れた作である。

試みに言い換えてみるなら、『〈虚言〉の領域』はテキストの孕んだ夢を、懐疑的ではなく夢のまま語ろうとした書であるといえようか。この比喩が適当でないにせよ、批評という行為そのものに対する透徹した自己省察から導き出された本書は、明哲ながらも夢幻性に満ちている。それは、本書の構成にも言えることだろう。「Ⅲ 余白の思考——反人生処方として」で論じられる引用を巡る課題は、「Ⅰ 虚言の愉しみ——ナボコフに倣って」にその実践として提示され、「Ⅱ 読むことの体感——蝕知する言葉」で見出された悲劇と喜

劇との闘争は、「IV 日常の臨界——あまりに人間的な」で結論される。各章ごとに明確な主題は打ち出されているものの、主題すらも呑み込むテキストの自由奔放さを、快樂として堪能することを本書は称揚している。いわば、ここには生真面目で息苦しい眩きとしての批評——宿命は存在しない。だが、ある種のトリックスターのような批評的身振りによって、遊戯的に浮上させられるのは確かに宿命——批評である。

その姿勢が最も先鋭的にあらわれているのは、「I 虚言の愉しみ——ナボコフに倣って」であろう。「記憶よ、騙れ」「青白く、はかない炎」という段落毎の題からも察せられるとおり、『記憶よ、語れ』『ロリータ』『青白い炎』といったウラジミル・ナボコフの代表作を論じながらも、あくまで諧謔と韜晦に満ちている。ある小段落においては、〈作者〉ナボコフの『文学談義』の文章と、彼によって創作された筆の〈登場人物〉プニンの台詞が構想された対話としてコラージュされる。あるいは、氏に届いたというプニンからの手紙が——つまり、虚構から批評者に届いた〈虚言〉としての手紙が——現在進行形の批評活動を刺激する。だが、そのような虚実の混淆した言説の豊かな色彩を、脱倫理化した批評行為と非難するにはあたらない。なぜなら、イーザー的な読者受容論の当然の帰結として、読書行為において倫理を等閑に付せねば、テキストの批評行為は本来的になりたないものだからである。むしろ、倫理の問題を持ち出そうとするなら

ば、テキストにより豊かな色彩を放つ角度を提供することこそが倫理と呼ぶのにふさわしい。その自覚ゆえに、繰り広げられるのは、〈虚言〉を利用して〈虚言〉を語ることが豊かな〈虚言〉を導くという批評的演戯である。ロラン・「ボ」ルトやダイアン・「バチエラー」なる批評家が本文に登場しつつも、そこには「読み」の挑戦的、かつ倫理実践の葛藤が描かれている。

「II 読むことの体感——触知する言葉」では、読書行為をアレゴリカルに身体感覚と絡めて論じた一章と、シェイクスピアの三大悲劇の一つ『マクベス』で語られる植物のイメージや、『ハムレット』における口や耳を用いた修辭的言説から、作品全体を覆う基調低音と細部との繊細な連関を解きほぐしている。この章などは、氏の英文学者としての確かな膂力を見せてくれる。殊に、ハムレットの優柔不断さのなかから、悲劇を遅延することの肯定的な意味を発掘する手際などは興味深い。また、続く章では、前テキストとしての記憶——記憶とは間違いなく〈虚言〉でもある——から、新宿西口の新都心を様々なコードの重層的結合の上に立つ物語性としてエッセイ風に解体・解釈している。威容を誇るビル群と儂げな記憶のあわいをたゆたう姿勢に、氏の作家としての顔もうかがえよう。

「III 余白の思考——反人生処方として」は他の章と版組みが異なり、比較的短めの断章で構成されている。様々な引

用や箴言は、氏の『へさようなら』の事典』や『へつまずき』の事典』を連想させるが、読書と退屈さ、食と文学、細部と全体、書く行為と引用といった問題系をベンヤミンから『アサヒグラフ』まで視野に入れつつ論じているところなどは、論旨の強さもさることながら、氏の感受性溢れる「読み」を追求するような、非常に魅力的な章になっている。

「IV 日常の臨界——あまりに人間的な」は、その延長にある章といってもいいだろう。家族や悲劇、人間性といった極めて近代的な思考制度——そして、その一翼を担っていたのは間違いなく文学である——を、哲学から社会人類学、歴史学に到るまでの豊富な知識と引用から分析している。だが、社会学的な興味から著者はそれらを因習として遠ざけようとしたのではない。文学の沃野を夢見るための方法的な問題設定としてそれらはある。特に、人間的なるものの傲慢さと、その延長線に位置する悲劇の特権性を解体し、微笑するペシミズムの文学の可能性を見る「悲劇的なるものの隘路」から「人間性という背理」へと続く氏の問題意識は、あいまいな日常とそれを穿つ筈の文学の布置を新たに描き出そうとしたものである。「V 午睡の前に——終わりを夢見て」も同様であろう。マンソンジュという究極の不在を目指した哲学者がいた。この章を含め彼を巡る言説があり、それがマンソンジュをよりマンソンジュ的な空所に導く。それもあるいは、「読み」の快樂のために用意された誘導装置である。

いわば文学批評が文学たるために、批評が文学を模倣する。そのような本書の視座は、プロローグの宣言を土台として組成されたものであろう。すなわち、「真」は益・無益、優・劣など価値を確定し、明快で翳りない。一方、「実」は曖昧で、あれもこれも、だらしなく受け入れる。そして言うまでもなく、「虚言」は「フィクション」ではなく、「存在の物語」なのである。かくして、ここでも、虚は実を循環し融合するのだ。

この言葉に要約されているように、「虚言」は、虚と実との単純な二元論によって導き出される概念ではない。むしろ、「虚言」について、「虚言」の領域内において批評するという方法的実践こそが、批評を批評たらしめる（といったら奇異に聞こえるかもしれないが）重圧から軽やかに逃れることを可能にしている。しかし、そこに軽薄な印象を与えるものはない。それは、氏の「虚言」に対する確かな敬意ゆえにある。 「虚言」を日常の破れ目を糊塗する「方便」に貶めてはならない。「虚言」はフィクションは、愛らしくも荘厳な、ときに戦慄に満ちた、しかし何よりも愉しみ溢れる、人間的営みなのだ。」と氏自身が目撃について述べているように、「虚言」の秘密は、「虚言」のような批評によって測定される。あるいは逆に、「虚言」の素振りそのままに、「虚言」が批評と歩を同じくする。しかし、それら一連のプロセスさえ、「虚言」の身振りによって記されるのである。

また、本書は読書のための刺激的な処方箋ではあるものの、現実から遊離したブンガクの言説の氾濫に陥ることから避けえていることも指摘しておきたい。「反人生処方」という副題が示しているように、〈虚言〉とは現実との接触のありかたを示した謂である。

そのような意味においては、『月の川を渡る』も同様、〈虚言〉としての現実といかに関わっていくかが描かれている。「幽霊になれとおっしゃるのですね。かしこまりました。大変光栄に存じます。」といううっとりするような語りだしをもつ「ドッグ・ウォーカー」は、従姉妹にあたる素子との辛い恋愛を忘れることのできない就職浪人中の中西敦史が、大学の指導教官で家庭に大きな問題があったらしい早田と一枚薄絹をはさんだような対話をする姿が描かれている。

「逆境の言葉」という古今の箴言をあつめたコラムの雑誌連載を持つことになった早田は、マスコミに就職希望の敦史に自分のゴーストライターとしての仕事を依頼する。しかし、その依頼も内容に関する打ち合わせも、全て電子メールかファックスでおこなわれる。それゆえ、交わされる言葉は一方通行である。その時間的な行き違いと互いの言葉への解釈の困難さが、互いの深部に踏み込むことを留まらせる。言葉は相手の核を不躰に貫こうとせず、柔らかにその周りを漂い、宙に浮いたままだ。敦史は次第に悪くなっていくらしい早田の置かれた状況をメールの文面から類推するしかない。そんな

か、早田は犬の散歩を専門的に手がけるドッグ・ウォーカーという仕事があることを敦史に紹介し、以前の飼い主に虐待を受けていたところを早田が引き取ったエリザベスの毎日の散歩をお願いする。

この小説には、互いの言葉が僅かにすれ違ってしまったために引き起こされた間違いが満ちている。だが、そこにしたり顔の悲劇は闖入せず、人間が他者と接触することの本来的な優しさといったたまれなさとが静謐な筆致で描かれている。そもそも、敦史と素子との関係が壊れてしまったのも、相手の言葉の真意の測定に誤ってしまったからだった。それらが、「逆境の言葉」に掲載するために様々な文献から引用された文章や、小説の改作など、テキストへの接触の仕方として象徴されている。『〈虚言〉の領域』から引用するなら、「引用が常に裏切りの正直な申告」であり、「引用の言葉はそれが属していた元の情報の文脈からはずして、新しい別の情報の場に移すことによる二重の帰属の関係を持っている」のである。引用が孕む力学が本来の意味から逸脱させてしまう。だが、会話とは本来的に相手の言葉を解釈・引用しつつ想いを述べることだとするならば、世界に対する不断の裏切りこそが生きるということではないだろうか。「もどかしさ」とともにある〈引用〉も存在するのだ。それは読むことを中断して、顔を洗ったり、食事をしたり、街をさまよい歩いたり、ただ時間をやり過ごしたりする他はない、むしろその方法しか具

現しようのない〈引用〉のあり方なのである。」(「引用、あるいは正直な嘘のつき方」)。敦史はそのように早田に接触し、早田も多分そうである。そして、かつてかかわった人々もそうである。敦史が大学時代の後輩と会話をしている際も、映画の引用が本心を語ることをうまく回避させてくれる。引用が微かな虚偽を背負い、そのために関係を円滑にするなら、そのような嘘は方便というよりも存在と同義の罪であろう。相手のため、関係のために引用を無限に繰り返す、誠実なその場しのぎが悲劇を遅延させる優柔不断さと重なってしまう。存在の明澄な物悲しさと肯定的な淋しさの漂う秀作である。

また、引用に関していうなら、早田の恩師である三輪俊介は、小島信夫『抱擁家族』からの引用であろうし、そもそも小説内存在である「逆境の言葉」にも、大修館書店から刊行されている氏の『へつまずき』の事典』からの引用がある。間テクスト性の面からも非常に興味深い。

「月の川を渡る」も同様に、痛みに満ちた他者の言葉の引用関係が錯綜した形で描かれている。不可解な娘の言葉や過去、池袋という混沌とした街、そして信頼している人間の嘘、それらが真実にいたることを避けさせる。だが、真実にいたることが生きることの根拠づけるのではない。虚偽ごと引き受けて生きることの強さと繊細さこそ主人公村瀬の生を根拠づける。「夜に誘われて」はむしろ、問題の渦中は周りの出来事として綴られる。描かれるのはむしろ、『伊豆の踊子』

のような再生の旅を外側から覗くような語りのあり方である。しかし、それだけに男に残るのは、静かな肯定の感情ではなく、何も得ず、何も失わなかったことのおどけたような苦みであろう。特に終幕に描かれる誰にも届かない秘密は、それゆえにあらゆるところに落ちていく寂寥の存在をほのかに示す。

以上で筆を擱こうと思うが、本稿を書いていて確かに感じたものがある。それは、書くことは読むことに似てくるといふ単純で力強い実感である。あるいは、その逆かもしれない。読むことと書くこととの悦びに溢れた両書を、積極的な干渉関係のうちに読むうちに、ナボコフと敦史と、そして氏とが渾然となった文学の秘密へと沈降してゆくような、そんな眩暈を覚えた。そのような、悪徳とすら称される読書の愉しみをより多く享受するためにも、氏の短編「森への招待」「賑わいの週末」とが収録された作品集を一読者として期待している。